



重修真書太閤記

七編  
七





待 8 へ  
 門 459  
 卷 67



重修真書太閤記七編卷之十九

郷志津摩實銘と切事

并竹内源三兵衛信州立退事

齋藤内藏助利三母方の從弟と郷意三とのいふのあり先祖越中國松倉郷に住る義弘なりなりとや義弘の五郎入道正宗の弟子あれども却て師に勝りたる作もありとせ世よめてとゆはと大形をからび義弘の子と義真とのひ弟子と則重が為繼が次とのいふ然るに義弘何とわれのひけん我子の鍛治の業と傳へば則重も皆傳へるるなり義真が子



大岡記七編卷之十九



ら銀治と業とを以て遂に信濃國更級郡戸部村に知  
由ありて移り住し郷志津摩と名乗り浪人体にそ  
世を送りける戦國といひ邊鄙といひ刀劍の目  
利者もなき金具商人も稀あれば志津摩が義弘の  
後といふを以て近邊の武士いふに及ばれ有福  
の百姓やと志津摩を見とて義弘の刀脇指を買求  
るものも多うとけるが次第くは数りさうと志  
津摩が目利とめてとるにそれあり志津摩も心驕  
り我眼にてみるに云べ大金を得るに事な難うの  
トと思ふより欲心增長し種々と工夫とよととも義  
弘の作さのをも多うとけるは尋る人の意に應じり品

の少くもふりて困ト果たりしもの不圖思ひ付  
ける筑前銀治の内よそ左文字一流はるく義弘  
に似たるものなれば左文字の弟子打景打あどと  
下直し買求め義弘の銘と切是に我家に持傳へし  
處ありと偽り賣どもその子孫のことなれば正真を  
とべしとおのひ更に疑念なく買取けるものと志  
津摩大金と得たりけるにそれあり常し似るもの刀  
に偽銘と切て賣ふを業とありあうべいのしり志  
津摩へ福有の身とやうにけり爰に越中侍に竹内  
源三兵衛と云のめあり元へ上秋房能の家人なりけ  
るの房能永正六年三月家臣長尾為景のため越



後魚沼郡雨溝あまがほとて生害ありし後浪人あり  
上うへ杖つえ民部大輔房能たみべのふねへ上うへ杖つえ右京亮憲方みぎきやうののりの孫まご兵庫頭ひんぐさう清方きよかた孫まごなり清方永享年中越後守護職とあり  
後淡路守房實のちたんろしゆふさね十郎じゆらう定明じやうめい惣そう五郎ごらう頼房たのぶと相續さうぞくし  
上うへ條屋形じやうやがたと申まをしなり頼房たのぶの跡あとと民部大輔房朝相續たみべのふねのちさうぞくしその跡相摸守房定其子房能なり  
又我またわれこれと薩州谷山の行安さつしゆのやまのぎやうあんとて聞きこし  
ああり行安ぎやうあんが子こなり姪やまひ何なにとも其業そのわざとあり然しかしと銘めいとて行安ぎやうあんこれと切きたとり行安ぎやうあんが作つくり  
姪やまひともの鍛う冶ちの金味かみ至いたてありしその故ゆゑいふと  
と云いへ行安ぎやうあんへ今一度折ひたとりありしゆゑと

おのへども炭すすの入目いりめと思おもへば心こころよの不滿みまなり  
ら仕上まじりあるやうなり悴せむや姪やまひの炭すすと惜おぼまはずそれ故ゆゑ行安ぎやうあん  
ありしやうなり出来い来きしのありありし銘めいの某たがひ一  
人ひとして切きり事ことありと申まをし也因ゆゑて思おもへば銘めいの  
ありしと證あかしとして金味かみと切きとと知しぬの両眼りやうがんの盲めくら  
目めと知しべし  
あめりし能主のちぬしは仕つかへんよの能刀のちやうありては叶かなはト  
今いまもと能刀のちやうといふの義弘ぎこう長光ちやうかう兼氏かみうぢ康光ちやうかうなどなれ  
ごも然しか何なにもたゆとく得えるやうなり人の尊たうとんは聞きべ信州しんしゆ  
更科さらしなの郷きやうの志津摩しづまといふの義弘ぎこうの子孫こそんとて義  
弘ぎこうの刀やち多く所持しゆぢとてとうゆ但義弘たがひぎこうの世よは多おほく

大岡巳二編卷十九

三



ぬののゑとをいふ子孫のまはとて左のど多く  
ハあるまどさ人に云う如くハ澤山とありと聞  
えさういふもして此ののと親しくありむゆと  
思ひ信州へ立越更級近とさうり又仮住して志津  
摩と懇意のののよたよりやうの知人よりありたり  
然るは同氣相求るありハ源三兵衛グロよりうを  
て誰も知人これ親しく語ると聞て志津摩此人  
ハ親しくして我自作の贋義弘と賣むゆとありハ  
しあう日あはびして懇意より兄弟より睦  
く交と結びけるがある日源三兵衛志津摩よめ  
うけるハ某事近日故主上救家へ召くへされハ依

てハ越後へ罷越ハ然るは上救家ハ義弘の刀少  
ハ歸參の節よりハ義弘の刀ハ肝煎申へと由申  
付らたりとあり若殿の料より求めらるる由  
りハ殊の外急りしゆハ付て日下部内記と云近習  
頭より目利者とさし越して貴殿御所持の御刀  
御譲りふさしゆハ御取次申へと申ハ付志津摩  
心中より大悦びありと所持の義弘の刀ハ残り  
少く子孫に傳ハ半と存ハ共御大名の御道具  
よりハ事ハ草深と處ハ埋置んより寶ハ其刀の  
心より取ても出せと申へハハハハハハハハハハ  
御譲り可申御取次被下ハへと申けるより然ハ



今日御持参いして日下部内記に御面會ありしに然して御刀の代あど御腹臆なく御相談被成然るべしと申て源三兵衛へ歸りけり志津摩とありし衣服と改め例の質銘の義弘と携へ竹内ヶ夜住に至り案内と請座敷に通う日下部内記に面會し刀と出しひきば内記請取とくと一見しいうも御重代と申をいれもあるべしと答あうる金色と申焼又鉞匂ひとて申ふかき御品ありけりあも若殿の御料も然るべくと存い然代の義も我々同士の取引にい者黄金三十枚も仕とてくいととも越後一國の太守の刀より黄金百枚とて御譲り然るべくい

但某一人として治定と申事もあり不申今一人相役人いそれが一兩日の内ふ某と内談の義有て罷越いそのののく為見ゆつて事決着直に代も御渡し可申と申ふより志津摩とれへ過分の首尾ありありしべ宜鋪たのを奉る由りて刀と内記に預けし志津摩の家へ立歸る其跡とて源三兵衛と内記と横手と打て大い笑ひ仕合ふしとてその志津摩も上秋の家臣日下部内記と云のの實に無宿の伴九郎と届うぬ目利をいりけり互にうかづと扱あしとて伴九郎の彼義弘と知音の大百姓の許へ持参し見をけるよ寸へ二尺三寸とよみ好



む所よりとて早々代を請ひるも彼百姓黄金五十  
枚を買へる由と答へる然バ我等へ一枚賜ふれと  
無心してそれより伴九郎の家より直に家財  
を取方付立退る用意とありたりける源三兵衛  
の伴九郎が歸り待とも歸り來ぬいりませしや  
と待とびて伴九郎の家を訪ひるも伴九郎只今旅  
立休むりける源三兵衛大にせよ立いりませしや  
即昨日の刀の如何とせよ代とバ定めて請取つ  
らん約束の通り半分分いへとのりバ伴九郎急  
用ありと只今あり甲州郡内へ趣くはる刀の代  
一兩日の内は先方あり貴方へ向て差越ひ様談ト

置いと申とバ源三兵衛いりも尤の申分共  
志津摩方より催促の時はいりません買主へ何人  
を其方同道して買主は引合をいへとのりバ伴九  
郎今いたまより兼いさ買主へ同道とんと云はる  
諸共庭へ出るとその源三兵衛も抜合を上段下段  
めくるも尤心得たりと源三兵衛も抜合を上段下段  
と切合し源三兵衛終に伴九郎と切合を懐の黄  
金を奪取とせしめと指て何處ともやうく逃去とす  
九郎の最期の一瞥迄憐へ聞えしりつとも掛  
集りてあれとみるも相手へ早逃失て伴九郎の言  
切たりとこころとと狼狽しやの地頭所へと訴



ける源三兵衛何處へう逃走して隠るもあし此人の  
伴九郎と切て立退しやと疑うことと手掛り  
志津摩の源三兵衛が立去て跡をくくす  
と聞と其より駈來りて見ると實はその人なり切  
記と名乗りののりとうくするうち志津摩が  
刀と源三兵衛とこの伴九郎と二人して肝煎りの  
つめと志津摩が刀の詮義及び段々と吟味を  
戸部村を追放せし源三兵衛の人相書めを尋  
らるると行衛しと伴九郎の切と損となりと

竹内源三兵衛春日の寶燈と盗む事

并春日大明神現罰の事  
竹内源三兵衛の伴九郎と切殺し黄金と奪ひ取戸部  
村と出奔し直上方へ上り和州に隠居たりし  
住居と定めん所の保人かひはそこ爰と流浪  
暮しけるうち奪取し黄金ものし遣ひかく  
今一飯もも飢る身とわつ終りの切取とあ  
強盗を業としその日くを送りけるよりの  
世間狭くはる天地廣くといへども五尺の小身置  
處はく晝の山林の夜に村里み出て関鑑の



急情と伺ひけるが不圖も春日大明神入源三位頼  
 政の納めたる黄金の寶燈あるものと聞出し忽ち  
 春日入来り杖の木間入日と暮し今宵と黄金の寶  
 燈と盗み取んと心の内は樂しきつゝ夜の更にと  
 ど待居りそれの杖置郷の志津摩へ戸部村と拂  
 これ忤意三と伴ひ是もおなじく上方へ登りける  
 が父子住あれ故郷と追放せらるるこ全く竹内源  
 三兵衛が悪心より事起りしは源三兵衛と尋  
 出し刀と取めどはる左もなれば刀の代を請取り  
 それ二川ともゆかり源三兵衛と打ちし此  
 怨と晴さんと我身の悪事いおめひも付た所々方

方と尋廻り是も同じく南都へ来り春日大明神入  
 祈らるゆと黄昏過て參詣と初ての參詣あり物め  
 づらしと田舎人春日の野邊と分行馬出し橋ふ  
 二本の塔雪消の澤入率川鹿道過て古郷のり善  
 趣の橋や五位の橋着到殿より直會殿幣殿若宮ふ  
 一拜とせめて今宵は御通夜とんと有來し昔とらり  
 返し只今消る身と知はる願の叶ひあはれ我身  
 のこりの子や孫の末り末り守らとととと餘念  
 なく祈り困りてととととと眼睡む夢のさめし時と  
 や曉と告りたる鴉の聲と驚きと下向の道はこれ  
 やね木下ゆきよあゆみあ立りくきたる人の



影老人あれど油断をば盗人あるらうやれ人  
と見うけつてめくまゝと何れのあるのと聲うける  
聲うけらばと振うる顔の正しく竹内やと嬉し  
やおのど一人と尋ねんと此年月の艱難辛苦おの  
ひ知やと言あううはうとめくまゝ源三兵衛右手  
よめらるる寶燈を左手よこして大口あき寶油  
盗人たけたち汝が實銘故に我が故主へ飯參  
もうかたは遂に其身の日影の朝夕の糧よこま  
ると其方故そある退ると云まゝと抜拂ひあひて  
ゆゆするたびらもの肩さき深く切こんだり志津  
摩も心得抜合を切むとべとも老人の初太刀よ

はりその上よ竹内り刀の長く二尺八寸志津摩の  
脇差寸短くもの一尺許打も拂も廣よて心よ  
やうをば戦ふらち痛手深手うとめさありらんと  
一聲叫ひもあえは其儘をころと倒るるを起しも立  
ば仰りたり止とて刀と拭ひ盗を取たる寶燈こ  
脇よとさんて人あき間よ立去んと脚と舉とと舉  
られをあら不思議いある事う心得と又踏立て  
行んととれと一足も跡つも先へも行ばあを免角  
とるまゝ夜も明とさうのゆく五体あひまてあめ  
とのとれを働くあめめ眼むうり立とくもよ立  
まゝ大地より生拔たる如くまゝりよけり源三兵衛



氣をいらい種々とあせしと坐らどもを臥臥とも  
 せは次第は夜明て御社へ仕ふまつる宮人とも  
 此有様を見こしていりある人をも問ひて  
 も音もをい側とみよべ六十近き老人と切臥た  
 とべ其邊血ふ穢と草も木も秋の紅葉と尤も似と  
 りある人殺しそのまゝと棄ておくべき事ういと  
 走歸りてそれくの司々立合て追取巻との始終  
 と責問と目のいぐの口さうけ手足は更よを  
 たらめ能々見よの手は持し寶燈は正しく春日  
 御社は何のせうり掛けん黄金の寶燈と世人の  
 沙汰する神燈あれは宮人の心々口々此奴寶燈

盗し立去處と此老人は見とがめらると終る老  
 人と切殺しつるふ神罰よとめく立どくともとく  
 みいあらん此老人の誰なる面を現るやと宮人  
 寄集りてよくみよと旅の人あふ見覺のあるべ  
 きと南都は見知ぬ人なりといへば宮人不審とさ  
 て此老人も同類ありめ立どくとなる盗人が獨  
 の得物なりとんとて同類と殺しつるよとある  
 評定をよの寶燈と取らんさんと手と  
 取て握りし指をお開くは指いとあをり働きて  
 寶燈は宮人のれを取収め此死人と盗人の町の司  
 入渡さんと掟のよと取行ふはが大社の作法



なり市司の出来り打倒して繩を掛せり立とく  
 ちある盗人の身体をかき成りけりあれは正一  
 く寶燈と宮人の手を取りつる故なり未代  
 あぐり神徳のいぢどはへりてわ御社月番岡木  
 對馬守出來りて社頭の地は血と穢たり枝と  
 一それより觸穢の宮人のつとも枝とすそその後  
 一社頭へ参仕たりけり  
 觸穢の次第死人の在地と甲穢と一初見人と乙  
 穢と一次見人以下丙穢より甲穢の枝と先より  
 乙穢丙穢次第と枝とあそび  
 市司の人々源三兵衛と引立て市の廳へ引ゆて行

事の始末と尋ねど源三兵衛陳し申様我等の中  
 國の浪人は神前へ参詣し通夜しつるゆゑ是  
 なる老人社頭よりけり寶燈と盜取て立のさゆ  
 間われと止めんと仕ゆ處刀と抜て切めりゆゆ  
 互に攫りて切殺てゆゆ然り年來の持病より起  
 り手足木強言舌とすまゆゆ處と社人たりゆゆ  
 一某を取つて寶燈と取りゆ故ゆゆ某と  
 盜人の如く申あされてゆ全く宮人達の虚作と御  
 吟味ゆゆゆと申聞くと市司の人々更は聞入ゆ  
 其方持病なりゆゆゆゆゆゆゆゆゆゆゆゆ何と  
 して寶燈と取て手より持とるを又持とる寶燈と宮



人の取入と時へ何とてとふと渡したるどと調べらば  
 是の如斯といふんとする所へ町の役人出来御渡りの老  
 人の死骸は我々共方子旅宿はう田舎人と其子意三  
 と申の訴申様との盗人と一見申度いと願ひはるり  
 即ち連申いと申はるり然ばこれへ召出はて同く  
 白洲へ連出る意三へ市の司と拜春日の社頭と切殺さ  
 せし老人の忤といふと市の司人其方へ何處の者ある  
 どと尋はるる某事へ越中國松倉郷の住人郷の意三  
 とてい父の即盗人は切殺され老人と名をと志津摩と  
 申と答はるる即ち即盗人とあり出意三見とれば意三  
 聲荒はるる竹内源三兵衛は何故我父と殺せしと

先達て汝なむとて刀と何處へやしぞ重代の刀の盗  
 人よ正しく父の仇はるると云つ司人は向ひ父と討し仇は  
 面會と願ひ奉るる是のめい父子心を盡して尋ひ重代の  
 刀の盗人といふとれば此者父は春日の社頭とて出會し父の  
 刀の詮議はるる此の父と討しとあはえいた願ひ  
 くは此のめい我等と下されい様は度と折入て言上とれ  
 源三兵衛大いり意三おのどごらるる様は申立とて  
 おのど越中國松倉郷のめいと偽りいひくは司人こそ  
 めと此のめい信州更級郡戸部村のめいと父の志津摩は郷の  
 義弘の實銘切て賣と業といひとめい勿論志津摩は重代と  
 申と刀と某故主へ帰參の土産とてあて存故主の役人



小見て處似ても似つぬ偽刀とて某面目と失ふのそあはる歸參もの  
あつた刺住られ信州と追拂られ浪々とするも元と云い志津摩が  
悪事も多遺恨さなる老人ありこの事何故我の賈のものと授け  
そめと二川あり言のふ内み老人氣早く引抜て切てうらやわらひあう  
抜合とて手の内くるひ打果し志津摩也とされ意三身の上とま  
つ御詮義ありと然るべしと申ひるる市司の人たちも定めし何よ  
もとよ越中といひ信濃といふ住處は偽ある時をその身よ何うあめ  
了然ハ信濃問合と戸部村と立退し事の始末と正しとのち又越  
中問合とあり事明白と定まるべし決着ハ其後の事とて源三兵衛  
獄屋のつあつと志津摩が死骸ありうらやめ意三ハ宿屋預けらる  
事とてこのつあつとせられ重修真書太閤記七編卷之十九終

重修真書太閤記七編卷之二拾

鳴龍近報仇決斷の事

并郷意三死囚の首と斬事

南都の市司ありて春日御社に掛奉る黄金の寶燈  
と盜立強ふなり盗人并其側し倒し伏たる  
切害人の事より盗人ハ上枚浪人竹内源三兵衛と  
いふのめあり切害人ハ郷志津摩といふのめあり  
と訴ふるハ旅人郷意三といふのめありと意三ハ  
越中松倉のめありといひ竹内が陳状するハ信州更  
級戸部村のめありと云うる志津摩ハ賈銘切とて信州



と追放せしむるの由源三兵衛ハ賈銘ふもと  
志津摩ウ所持の刀とめり取り罪人なる趣も  
大形分明なつとも意三ウ申口と源三兵衛  
陳状と合さるるより是ハ信州へ問合て後のこと  
と云議み決着しけし市司より郡山の筒井家へ  
言上し及び一處筒井家より寺社のこと奉行せし  
鳴倉和田右衛門と云もの一通り是を聞て判しけ  
るハ竹内源三兵衛とのよめの信州戸部村より郷  
志津摩と云のめりて賈銘の刀と奪ひ取て  
信州と立退御志津摩ハ賈銘と作りしと露顯し  
信州戸部村と追放せしむる由ハ他方のことなれど

南都よ於てさしめしむる謂とハ只源三兵衛  
ケ罪状と云ハ春日社頭よ於て人と殺害しつると  
社頭よ撰奉り一寶燈と盗しハ他よめり合無  
之南都切の事なれば南都の作法通り申付あり  
於て誰のれと難とべし意三ウ申立し信州戸部  
村と押隠し越中松倉と偽りしハ賈銘よ追放し  
逢ひしこと包まんが為なり然とも信州よこの  
筒井家よて構ふべしことハ其父と討しつとハ  
南都よての事ハ相違あり尤もよハ意三ウ源三兵  
衛と父の仇と訴ふるも亦非理とハ云べしとされ  
と夫と聞届けて源三兵衛と意三よ與へて討とふ



べ春日社頭の法令立ど父と討とと云ど他國人  
同志のこあれへ南都の是のこ一り筋あ  
然る時へ寶燈と盜と社頭殺害人の二罪ありこの  
二の共ふ社頭極重刑として少も容赦とて  
然とへ意三が願へ聞届とて下知とて  
市司のり意三へその由と申渡しとて意三あ  
り又歎息一源三兵衛と尋ねん為と諸國と流浪  
種々艱難苦勞いふべ偶あれと見當と  
父へ返打とあひ子はと訴ふる國法とて許容さ  
とと殘念申べり但遮て願ひ奉る意趣あり  
源三兵衛御國法と處をられとて御社頭の法度

立ざる由ふ依てや私へ源三兵衛と被下して  
仇打と許され私源三兵衛と打申は私と以て  
源三兵衛ふあさして御定の刑へ行はれは  
ゆり又私討はゆり真の源三兵衛御社頭の御  
法へ行はれは半と勿論と御座は此條と以て一  
づ私ふ仇打仰付らと可被下と御申上被下は様  
書面と出しゆるはり市司あり申立ゆる  
と和田右衛門申ゆるは至極道理と聞えはへとも  
意三源三兵衛とて時約束ありとて春日ふ於  
て罪あさ意三と重罪人の代りもあさめ  
へ併再應の願あれは重役と一評義とて



願書へやうづ預り置とける旨と市司より意三へ申  
渡されけり然しそのち和田右衛門此由と重役中  
へ言上しける島左近あれと聞市町の雑事と奉  
行する身とて夫れどの事と判し得ざるおとあさ  
よと云て笑ひしうぐ和田右衛門うこそあり種々  
と考ふれど更と思ひしうぐ思案し煩ふ体とて  
左近申ける様此頃若さのめとてそめは當身と  
いふこと何の用とありしとと和田右衛門う  
ひよりいと申て退出し急ぎ南都に馳返り足輕の  
内にて心利たるめのと呼出し云々と耳語しうぐ  
足輕心得その夜牢に至り源三兵衛に飯與ふるふ

りしうぐ一當あてけるふあそと源三兵衛  
とのつけと仰て息絶たりやぐと翌日未明と意三  
と呼出し其方の願書の旨と以て家老中彼是と評  
義よ及びける處昨夜源三兵衛牢死とり本あり社  
頭の刑罰を行ふと囚人あれども急病とて死し  
たれば是非よ及む依て願書へさし戻とあり囚  
人の死骸へ南都の刑處へ取捨の様申付たりと言  
渡しけるふより意三も本意あさうごりひらげとど  
も為べき様あく市司の役所と退さ去あても源三  
兵衛が死骸なりその儘ふ打とて置とてあはる  
と思ひ定め急ぎ南都の刑處へあめひと見とばえ



や源三兵衛が死骸ハ薦みつゝみて捨てあると見  
付已竹内源三兵衛刀と奪と一のこあらば住あれ  
一戸部村と追放とすその上父ハ汝が為返  
り打逢一この遺恨いりたりとありとあり某武  
運はさあぐ汝が生前討果はと叶とぬ今この死  
せる骸が討て怨と報とべ一おのひ知中と云  
りしよ刀と抜り早く真二河と切とて不思議の  
源三兵衛が死骸むつくと起上り両手と上て飛め  
めると意三とらさば蹴倒して首打落しその首携  
へ父が仮埋の墓所へ手向けりめく南都と立退  
何處へゆりよ一と思案と一美濃國なる齋藤内

藏助利三ハ由緒あり此人またもて仕官をな  
と思ひ定め美濃路へあそいおのむさけし此頃内  
藏助ハ稻葉山に住しけり折節所勞とありとて  
五七日弓籠り保養の為下屋敷に居たりける處  
へ郷意三と名乗て推參しけし内藏助呼入て對  
面し信州に住居するをいへ存知ある音信も  
とせり急とめり出何とて尋來するふゆと  
問ハ意三あそいと流し御聞及びの信濃國とハ故  
ありて立のさ處々方々流浪とす南都とて父の  
志津摩ハ人殺ことその仇とハ打くゆへども然  
るべし後楯もあく實に以て難澁のさしと語り



御内藏助も氣の毒におのひ然るべ當分某方よ  
 寄食しあへりも席もあへり齋藤家へ推擧しゆべ  
 一と懇よのりて意三も心あつた然るべ  
 頼こ奉るとして利三の家と主と一足と止め年月  
 と過しけるうち刀劍の目利と拭とと申立齋藤家  
 の長臣長井父五衛門またり奉公と望しけるよ  
 龍興その藝と珍しがり馬廻りの侍の末よめり  
 めくらとたり意三の本意の如く齋藤家の士分よ  
 加らうつと共今まで戸部村よ浪人分よて任居と  
 一とい車うらう士の交うとあれば田舎あう意  
 三不案内のことあるを以て總て内藏助みたる萬

車ころまうあひけるあう齋藤とバ父兄の如く  
 一たりけり然るよ一年二年ととこけうち家中  
 一も知音のの多く出来のちく互に酒宴あど  
 ころ様もあうけるが菊川貢とのゆめの意三と  
 別て親しくめり合内外の隔あけ出入りが貢意  
 三よ向ひ申様我等のよと獨身ありあどよあり赤  
 木多膳が妹と妻よ申請んとあゆども多膳とい  
 尤の親しう御邊の赤木と深く交りあへり  
 此事御取持被下ゆへと頼けるあう意三うと  
 ありゆと請合けるを見て貢あてひ申ける御  
 邊尤様よ安々と心得あくと某の小身あう赤木ハ



大身なりし禄いちと不釣合ふとバ一通りもてい多  
 膳合點のしれやまに依て貴殿とたのむあり貴殿の  
 骨折もて車首尾をい生涯の大恩ありといふ意三  
 申様大身小身ふりて縁談を取結ぶと侍の本意  
 とおのれられを只塔の男氣と撰ぶべきことなり此道  
 理もていりふも赤木と説ぐとめごとく約束しそ  
 といふ意三の赤木が宅へおのむさけり

齋藤内藏助卿と赤木と宥むる事

并意三内藏助と恨むる事

郷意三の赤木が宅より來り四方山の物語とありさ  
 て後菊川貢と此程追鳥狩に出し貢が矢継ぎ

やふて獲物多うと尊より野馬を馳し新あど  
 て近頃多く得難と侍ありと云へ多膳もあるゆと  
 此間より諸侍の語ると聞て貢が弓馬ありと勝と  
 と云この知とといまご正しく見るとあ御邊の  
 同道ありて見むひしといふるれバ我見しとおか  
 けとあり天晴齋藤家の寶ありと喜悅の体と見を  
 まし意三のゆて申様多膳とのよの御妹あり定  
 めて他へ縁付むるありん貢を塔よりあみてい  
 如何可然御間ぐりありと取のつを聞て多膳申け  
 るのいりふも貢を塔より取は不足ありといふども  
 妹の二歳の時より何某ふ縁組したるふ何某早世



角懇意よいころと此事へ承引しと断い  
 ひけるより意三の菊川貢よ請合詞もあは  
 大に當惑一二度多膳は向ひ仰のおゆし道理至  
 極ふいへども御幼年の時の御約束といひ先う  
 も幼稚とて早世と云べ入與あり上のごよもあ  
 らびそれとこの固く守りあること餘り窮屈よ  
 聞えの忠臣二君よ仕へばと申ととも二三百年以  
 來尤様の侍もあけいと申と多膳聞て御邊近こ  
 頃當家よ仕へあつて事の始末知むとらう某が  
 妹の年齢も知むとらうけとば尤いころとあれど

菊川が父の我等が父と無二の懇意ありし所領  
 の事とて互に意趣とあつて我等が父の果るころ  
 菊川と縁と結ぶといふはあつたも此節い  
 り是等の所と勘辨あはるさて菊川が我等が妹と  
 所望とると御邊とめて言入しあつた去年よ  
 のありげん何某とていふれし時今今如く申  
 て断申しゆりこれへ菊川と塔よこらんよ何  
 某へやの埃扱してその上よ縁と組申てこり  
 御邊の我等と断金の交わりこれへ某も心と殘さ



ぬぢりあかりと他々の侍中と親しくせらるる  
 共近年仕官の御身より左様のことより口入あるま  
 じとせらるるといふれき意三もいふべき詞あく御異  
 見辱くいと會釋して歸りけるがごとく菊川も頼  
 まれ請合一分も立びその上も新参あれば侍  
 中のことよ付てみどりよ口入をせられといふれと  
 いうあも口惜しいうよをんと日一日思案しつと  
 ども元より私曲奸智またけ梟雄の心なればあ  
 めくべありふると悔しきやうのさうけるああり  
 此上の赤木と打果して侍の意氣地と立べと横  
 さすよ思ひ募り終り多膳う許へ一通の書を送り

此間申つる義に付堪忍あり難さとあり鏡野に於  
 て御出會申存ふと申述すといひつらうと夫も  
 り家内と取方付身うらうとて鏡野も至り今や  
 今やと侍居たり多膳の意三が状と披き見て此間  
 の申ふとい菊川貢り縁談のことあるべし道理をこ  
 けて言ひることを聞入あり如斯企とあり無法人と  
 相手も取もあつとありと出會をばい我後た  
 らし似たり更にいで逢うち果はともうち果さる  
 る共夫の時の運ふらうとて家人も知さば只  
 一人鏡野のいごう是とみとべらうと意三の休  
 らひ居て赤木殿うらうを御出ひひらう抑御邊



と某と別遺恨いあへども菊川頼  
 一分之びりて是處へ御出と申てい討も討  
 も時の運と申ていいざ参らうと抜打入切て  
 多膳も心得抜合と真向目みうけ打こめ横  
 開りて空を切と胴切と打拂へ躍上て下とさ  
 るいづとも得る習練の手の内一上一下一  
 もとに戦ふころめくる處へ折るも齋藤内藏助  
 出來りこの体とてとて誰人あるうと遠  
 目の疑ひ近付みと意三と赤木殿互よあのごと  
 削るとい如何ある遺恨一通り某へ申聞られ  
 意三いあると我等が親とこのの兎あも角

も某あうと取計ひ申と云とて赤木の口と  
 引いとあげなると齋藤殿いさげとすれん  
 けとと事の始末と申て我等が妹と菊川貢う  
 望のうその媒の意三なり妹の事の齋藤殿も  
 らをむうが如く先約の塔早世とて又外縁  
 と結むん様もなり其上菊川と某とい親の時  
 う意趣も有それ故断申をいなり當家久  
 ぬ意三との事の末本知むるぬ如斯とて迷惑  
 をらうと申とこれいたゆとて尤様のとて掛合  
 ふあると申とて遺恨とて果状と付らとて  
 う是より外別事ありといへば意三も其通外



遺恨の言立ぐさしそれさへ立言分り夫立  
 武士の一言立ぐさしそれさへ立言分り夫立  
 ぬ時命ととて親友への意氣地ととて可申  
 と存諾し逆の事と云よろう内藏助申けるい何さ  
 菊川貢も一通りよてい赤木殿承知とよと  
 ひつるよてこの縁邊の六ヶ敷とい知とてと夫と  
 容易請合し意三新參故の疎忽なりその由貢へ  
 申あべ決て意三越度よあうべそれと彼是言は  
 のり命と果して詮もあくその上殿より賜らう  
 此三四年の祿の恩とばどの命よて報らうと思案  
 直見あへとりそれと意三も刀と杖め如何よ

餓死とべうり我等が命齋藤殿の御取持それ  
 故繼ごし此命私物よあうぬ由いあひ知ていへ  
 ども我慢をよて言つる事あり及びい  
 全以心得違ひ誤り入ていなり赤木殿先刻より  
 失敬の御免あはゆと會釋とらふり多膳いめと  
 ろう好まぬと何うの異議よ及ぶと意三殿得心  
 あうり愛度いと打解し詞よ齋藤大よ悦び幸よ  
 持とる獨樂の提重あり此よ中直りの盃をこ  
 ゆと塵うち拂ひ赤木と郷と相向ひ中よ齋藤立入  
 て互よ盃取うとこの後遺恨あるやとめさう  
 合尉斗咆うち栗らうとぶ二種三種取着らう酔く



こゝろ歌ひつ舞つ日も夕陽よめあき頃三人共  
ふ袂とこころちとのどくが任家へと引こらうとぞ  
飯うける心の暗の晴ゆらぐ已と已が身と果は愚  
ぢううける世の迷ひ御意三へ我家へ飯う今日の始  
末とつらくと思廻いあめはも眼滞夢の醒し時  
あこれ齋藤の扱ひあくへ多膳とたとひ討たりと  
も此家よ枕の取めこめ又討とたらんよの三  
途の川よ迷ふ難有も齋藤が來會いこよ嬉し  
くも内藏助が扱ひらと一車うか是と云も今へ世  
よあそ母の由緒と操返しゆあめはと晝の芝  
居と目の前よ只わうくと見こころれ彼盃の次第

こゝろ得ぬ抑中和の盃あり双方一度取上ぐと赤木  
が盃と某もこゝろ某飲て赤木ようふと一赤木も某よ  
ひさるに似たり是へ内藏助申て見んと夜の明を待  
めぬ齋藤が家よのこゝろ此事を申出とへ内藏助これ  
へ某途中の事よと盃へたご一川御邊へ我等が親族を  
り赤木へ他人なり親族と後より他人と先よとへ誤  
ひのこゝろ勝負やとこのこゝろ意三も詞をくき帰り  
つと共こゝろ堪へ我新参のこゝろ多赤木もあか  
どらんとやへ齋藤もめろくこれゆとあめは口  
惜然者齋藤方も親しとて齋藤が家來ともよ  
笑これんも残念やうとあめはうらやうとやへ内藏助



この疎々しくつらつらと龍興の家めらび美濃  
國へ織田殿を奪へんがらう内藏助も浪人として稻  
葉のもとへ寄食し意三も美濃と立のて京へ來りて  
刀の研と拭と業としてつらつらと世とつらつらと  
ち内藏助は武勇のののなれい明智日向守に従ふて一  
城の主とあり昔よまある富貴の身とありつらつらと  
是と遺恨よあらひうの年來疎遠あつて上我身とら  
つらつらと一日と送りぬる細工人なり齋  
藤の一方の大將とて世よめとあらうと見るつらつらと  
つらつらとものともひひとて空つらつらと年月と過とつらつらと

重修真書太閤記七編卷之二拾終

重修真書太閤記七編卷之廿一

齋藤内藏助山崎落の事

并盗人内藏助と訴人の事

山崎の戦敗と日向守光秀勝龍寺へ入り  
も溜り兼坂本と志し落行小栗栖は土民の為  
落命しつらつらと重恩の主と弑とて天誅とゆひ  
と齋藤内藏助利三の子息伊豆守利光と共に大軍  
と切靡け諸人の眼と驚らひと云とも筑前守の後  
陣月の恒が如く日の昇るが如く次第と勢とさ  
み味方へのやとつらつらと打かされ立直つらつらと見



陣へ切る程は伊豆守利光今へ是迫り筑前守の本  
陣へ切入る程戦ひて討死をせむとて存亡と不  
知と云共心一こと人なること容易死しあふべし  
ら我々も命をたむひ如何もして筑前守  
入近付差殺して日頃の恨と晴とて死し一旦  
して易く生れ難しといふ言あり一よめ此場を切  
抜べし必しゆるか伊豆守といふめら利光も  
心得いとあり早く主従らうよ十七騎袖印  
笠印あがり捨雲珠まのて扣えたる大勢の中へ  
このとおめりて駈入と敵これ程小勢あんと思

福の中を明て通しける齋藤父子の雲手結果十  
文字ありけ破り日西山に傾きと黄昏時を幸し  
父子二人淀川へ乗入八幡のうき遊ぐをける  
る川の表らくして物のあはれの定りある後  
バ向ふの岸へ渉り付甲冑脱とて着るむりふ太  
刀が馬も終日勞とさり何方へあり共忍べしと  
鞍をたらし縛とらして放ち遣り父子南北へ  
こり心々も落ちてけり然るに内藏助坂本と志  
し宇治の方へ落ける行違ひたる荷付馬馬子の  
ある醉鼻歌うし余念あり家路と急ぐ帰り路油  
断見をよし只一打車切馬子の管笠引うし顔



等院とて急ぎ行幸崎濱の松の蔭静腰の兵糧と取出し  
 宛見とて急ぎ頃へ六月十三日晴りたる胡の  
 烏鵲南へ飛と詠とて赤壁のひりもりゆと思  
 ひゆり磯打浪と詠とて赤壁のひりもりゆと思  
 母が宿へと趣とぬ堅田の乳母が一人子と代助と  
 云の内藏助と乳兄弟そのりて此年月絶を  
 音信親しげとて山崎の軍とて其儘馳付て合  
 戦の容子とてけの明智方惣敗軍との噂あり南無

三寶我主の齋藤どのと守護しあへいりあも  
 内藏助殿の先途と見むゆと走りけり乳母の我子  
 と待りて七拾越し老が身と杖と寄川の大道と  
 一足二足の行向ふと見とば荷馬と追て急ぐ  
 旅誰人あるやと見上とばあやゆり尋ねる我子  
 立帰り互に無事と祝しつゝその夜いづるを休  
 息とて内藏助殿の行逢は然とも明智方敗軍  
 齋藤殿も落ぬひりて聞たると何處と當と知由  
 かく詮方ありとてはあくと母の小聲と養君の



六言七續卷七

内藏助殿 ござる方へ御入と聞て代助大喜  
び人目包この手業よの鉄鎌とらを参らと時と  
松風さそふも油断あくと母と子が實とほく  
を深切に内藏助も打とげと疲とを養ふその内ふ  
雀乱の氣味ととらあつて母と子とめらる  
めらるゝ看病し薬を煎ぶる火のあつた炬こめ  
と障子と開き風とやの巾の拂曉ふ三十むらりの  
旅の男をさうの荷と戸口よあつて内へ入て湯  
一川とつて代助のさうと曉あつて宿を出何  
方より来りひんやの何方へ行人と問どめり  
は問もれば件の男の會釋して坂本より貝津の方

へゆくののと答へ川と暫時めらひ居けるさうち  
奥の間よと食事の望あつてといふ聲めらると首と  
めらるゝ聞居さう此ののの明智が足輕よと軍以  
前よ出奔し渡せあつて軍場の物と拾ひ落人の  
物具とさそ朝暮のたつたとさう川と暮しけるさ  
内藏助の聲と聞知ハ彌あれと伺ひ知んと種々語  
らふその處へ表の方より大勢寄来りといふ盗人の  
あつてありと呼らるゝこみ入て矢庭に彼旅人と  
引とらへ代助母子と見返りこの盗人とりくやん  
バ此ののの同類あつてんを引捕へると下知をれ  
る代助陳ト申様此のの湯一つ無心と立寄りの

六言七續卷七

七



み元より知めのよもいそ何とそめくゆの可申  
 と云ハ旅人陳じけりいりよ湯の無心よ立あり  
 夜のまも明くそ何れ故あむし休息仕ゆのそとい  
 ふ處へ庄屋年寄兩隣のの立出代助も限り左様  
 ふ怪敷めのよいそ何れと請合しうハ旅人のそとい  
 立て其役人の立帰る跡もて代助と息と繼すハ安  
 心と云つても庄屋年寄兩隣の者へ挨拶し此後旅  
 人の勿論往來の者も心を付て居さうけり然ふ  
 ふ此盗人様々と拷問をさしけるよ盗人申げりハ  
 私悪事ハ聊のこよの私と御助け被下ハ一大事の  
 ことと注進仕るべしと申あり役人共一大事とい

何と云と尋ねしうハ左とバハ私命とたす御助  
 下されいそ只今御詮議さしハ齋藤内藏助  
 隠し居い處と申上アと云役人中推返し其方ハ  
 めかたハ齋藤内藏助と見知さるゆと問を盗人  
 やと申様元來私義ハ明智日向守が足輕とてゆが  
 山崎出陣の前ハ暇くれらとて浪人仕ゆゆ内藏  
 助面体音聲よく聞覚ありゆ何處もても聞対し申  
 さるかと答へゆるまあり如何も内藏助ハ隱家と  
 注進ハ彌以齋藤と相違なくハ其方一人の助命ハ  
 申上て得るハアとてやまの盗人と牢舎をさめ云  
 云の由と筑前守へ言上しけりハ能々探り索めて

大隅記七編卷七



さて後注進をべしと申渡されけるより役人中  
それより堅田の浦へ忍びと入りの盗人と捕たり  
家のあつらひと様々と尋ねけるに彼代助の家  
誰とぞ知ぞ隠るる人のある容子を聞出しそれ  
り商人より物貫六十六部回國の僧あつらひ身と  
ゆつゝその人の面と見むゆと心懸しつゝもの  
た面と見るとあつとめてその年頃やう共聞知む  
やと日ちり立ちしう入替りあれと詮議し日と  
さ祈げらるち代助の家よめつゝの衣たる  
帷子よあつゝこの紋らつゝたると見定たりと注  
進しつゝ正しく齋藤の家の紋やう其人は相違

あるまじくと即筑前守の許へ申けるに然らば捕人と  
遣らるべしとその役人と定めらる

筑前守齋藤内藏助の在所と聞と云とも神速に  
捕人を差下とてあつて是其逃去て跡を暗やさん  
ことと待ののよ似たり蓋光秀の恩を以て怨と答  
ふと云とも齋藤内藏助の恩を以て恩と答ある  
ものなり主よ仕あるもの只其主の志よ従ふの  
み何ぞ其他と論ぐる暇あるんや是元禄の内  
藏助其主の志と遂ると以て心とて其主の志  
の善不善を説ぐる所以と相似と  
齋藤内藏助利三被召捕事



并乳母才覺義死の事

齋藤内藏助利三ハ雀乱の体なつてけつらその病瘡  
と變へけるよふあり代助母子さぶくよ女抱しつる  
真實の至りよや大み快なりうい日向守も討と  
坂本の城も落日州の内室と始長閑齋并よ左馬助  
以下忠死のめの百七十餘人よ及びびしこと聞その  
めの共の魂魄ささう内藏助と臆病なりうとゆ笑  
ふらん未練ありとゆささうらん今暫やあむ此  
病なき全快をハ筑前守よ近なりて面々の冥途の  
心と慰むべしなうと頻病の愈よの早本望と  
遂てんと心とあせり氣をのこけりよ天正十年六

月十七日筑前守の下知とて一柳市助直末田丸  
幸大夫直昌兩人と大將とあし捕手の名人三十餘  
人其外警固の足輕五十人と引率し堅田の浦へ發  
向け

一柳市助直末ハ太郎左衛門宣高の孫又右衛門  
直高の長男監物直盛の兄とて今年三十五歳  
あり田丸幸大夫直昌ハ北畠權大納言政郷の孫  
田丸中務大輔具忠の男今年四十歳なり  
内藏助利三ハ世に聞えける勇士あり打物取ても  
類なれよ弓馬ハ元より家の業山崎よての軍あり  
油断して手と負ふ捕外して笑るるふ若手よ餘る



このやと陣弓紙鉄炮を用意たり且一城の主  
として六七千の大將たり縦令めくして任とも  
幾許の伏勢あらんも計らば又其外堅田浦の  
御民とも同し齋藤は荷擔せり心あらんも知  
べし賢く逆して敵とて損じ味方の勇氣を撓ま  
はる賢く下知し堅田は押寄代助が少  
さ家を取巻たり忍びゆるふと思へども大勢の  
こはれは足音響きてさし代助は内藏助が  
為ふ薬と買んと大津と志し出行し留守あれど耳  
のゆゑ内藏助必定敵の寄つるを病みけりも齋  
藤の家は生さし武藝の早業ひのくと起て帯引ま

め腰あはさばり小脇差さしたる障子引明て見お  
ろ向ふし一柳市助大音あは明智日向守が侍ふ齋  
藤内藏助利三この家も隠し恐ぶ由訴人ありきた  
しうは知筑前守の下知とて一柳市助直末より  
う向ふし尋常ふ出むへと呼ばれ内藏助めり  
めと打笑ひ訴人のありて露顯のうへ何とて  
未練ふめくると一柳市助との早是へ御入ゆと  
いふうと思へば射出は鍔利仁將軍の藝を傳えし  
利三が最期の弓勢瘡よとむ時なげく矢庭ふ  
七八人と射殪たり内藏助これより更に見ぬ由  
あて指つめては兵と射引つめてはと射矢種



もそてし盡んとしと乳母へ見まらう納戸へ走  
て入布織とこの草竹取出し與へし時よ取ての  
氣點なり一柳が手よ留鳥女今太郎といひの  
走寄と内藏助弓の鋒よと真向めぐけ兩眼の間を  
突けよバそのその其處へ倒れよ其續りて中嶋勘  
助立めくると小脇差よと胴切み切あをさう天晴  
手の内見事あゆそと退あふあ豊浦万兵衛田中  
忠兵衛御見知あゆんと組付と左右へさのと切放  
世よ例あさ働さうり堀内庄兵衛船橋次兵衛中  
嶋利右衛門三方あう獲めよと内藏助あゆの  
めのしやと聲あるゆ脚とあげて堀内が隠囊と

そのつと蹴よそのはよ小氣と失ふて倒れけり  
その間よ船橋中鳴り襟と合とて切たよ末吉藤  
吉舟波平次郎上坂市兵衛玉屋頼伊兵衛四人一所  
よ組付とい組とて髻ちつり三方四が一投打  
ば鼻血あさり死してけり足輕と白は是とさて  
年毎よ捻棒打あう一度よ嚏とめるをばあさ  
あよ幸切あをさう間よ十四五人生死い  
らびたあれ臥市助幸太夫一手あう足輕ともと  
制しつう糸と用意の紙鉄炮いあうと雨の  
如くよ射うけり内藏助らとあうあくと雨の  
たそむ處と見をま寺田定七四辻本藏女巻勘太



坂口次平左右より組付と内藏助慮外ありとのひ  
さよ寺田と引揚て三間をりり投出と柱首と  
打付らばそのまゝ其處に死してけり坂口次平の  
肋と蹴らば倒れ死を四辻女巻の左右の脇に  
付られうんと一聲さげびもあえび殺さるこれ  
をい更に見むさもせ堤與兵衛奥谷新平長濱惣  
七ちりるまゝと首筋つうんで合せ合とつと打  
らそのまゝと額やぶれ死してけり市助幸大夫  
あさろふ下知して紙鉄炮と打ると内藏助射を  
くめらば如何ふらをとんとたぬらみ処へ要田元八  
出石久藏飛くると右と左へ引敷て蹴ころさん

とすいげとへ市助幸大夫両方より寄合ひまよ  
田出石のろくも息の絶ふりけり今はい是すてやう  
手と餘らば打て捕りて下知とる初と足輕とる  
一柳田丸と續いて押りけり終に齋藤と押ふとて手  
取足取繩をりけてけり  
一書し齋藤内藏助が切殺したる馬子の堅田の  
次郎太夫が子とて次郎太夫の内藏助が乳母の  
まぢり馬我家と知て飯來りしみる乳母夫婦  
我子の殺すとと知といくとも夫婦とも内藏  
助と止めてるとと養ふと深切なり其内ふ訴人  
ありて一柳市助田丸四郎大夫馳向ひられと捕



ふると云とも乳母夫婦とい忠なりと云てわれ

代助の天津の町屋にて堅田と齋藤内蔵助と忍び

居由訴人有て筑前守の手の者罷向ひいと聞ゆい

か足を空みて走廻るよと一柳田丸も引取り跡

なりとく牙とくして無念めれとも甲斐とてな

乳母の代助と見るありつと泣出し汝り乳を

養育するを内蔵助殿とゆく捕手よつとを

悔しとせめて汝り居合あり今をこ捕手と

支えてす口惜や老が身なり女はぐもこく

いたとい啗付てなり共敵なりと捕をい

士ふ在齋藤殿御夫婦とて生甲斐あるものと

やあむとらんいせく若殿あり御先よりのりて申

こけといふあり早く内蔵助が脇差と取て咽とぐ

こと突つとぬこの儘息の絶けけりめくみ處へ

堅田の庄屋年寄打をひひの代助其方へ齋藤内蔵助

とくやのひ科あるやあり召連來とこの仰ありと出

湯のたぎるを杓に汲取て村役人の首より眼口とて

ひの焼と表へると逃出るとの間代助座敷へう門

の戸引メ立やうう腹と切てと失ふけり



一書堅田より大津へ三里半といへり京より七里と知べし  
 堅田村湖よ添し地と北國海道より十町じく東よ  
 あり分ちて北獵師東獵師外輪野の内東の切宮の契  
 道中村西浦といふ本堅田と今堅田といふ間堀一川隔  
 て橋あり今堅田と北獵師あるひ小判木といふやまこ  
 堅田千軒といふ古の稱とて本堅田衣川と合とて云ふ  
 り本堅田今堅田給川三村とて凡三十石の地なり今堅田  
 と六關濱といふむらゝの關屋濱とも云ふやまの關あり  
 て船の往來と改し故の名とて此處より湖と東木の  
 濱へ渡る廿町といへり代助が家の浮御堂の前あり  
 と云り今その處定むらゝ

又或書よ代助の北村氏と伊賀服部と一流あり共云う  
 又或書よ光秀の妻の一族ありと云  
 内藏助が召捕とて由と聞て件の盗人又申様私の命  
 へ御約束ありへ御助け被下し事なりとひあり但今  
 一川御忠節申べくは間私と御召仕ひ被下し様御取か  
 願ひ奉る申よ何事と尋ねると光秀  
 が黄金埋め置ひし處を存知ひ昔申出しとてその  
 よりと筑前守へ言上しけり筑前守聞てそのめめい  
 めして夫を知らざるをよ其埋め處は此方とて  
 く知たり但洛外ある洛中ある洛中の皆此方とて  
 詮議し出しつとて其方とて及むとてこれ



あり盗人さうらふとて詞ありやありて洛外に三ヶ  
 處有之由と申出けし筑前守その負数と知たるゆ  
 と尋むふ負数存知不申と云ふよりそれあるべ  
 てい汝が申處胡乱ありとて取あげあてたやうに盗  
 人とり出し其方如何とて内藏助が聲を聞知たり  
 かと尋ねむ盗人段々さうらふり遂に内藏助が  
 家の下男あるよりと白状けしむるもあるべし下  
 男とて主と訴罪一川人の家へ押入ての取  
 罪を合とてゆるとてと奴あてたとて内藏助がる前  
 へ引出しゆとて首とてぬらまきけり  
 重修直書太閤記七編卷之廿一終

太閤



